

おはようございます。

長崎大学人 河野茂です。

歩いて大学へ向かう途中に、梅の花をみつけ、
桜のつぼみが少し大きくなってゆくのが感じます。
別れと出会いの季節がやってきましたね。

卒業生は、残り少ない学生生活を、退職する教職員の皆様は、長きにわたる大学人としての任務を、感慨深く振り返っていることと思います。それぞれにご苦労様でした。

大学というところは、年度毎に仕事や学業を区切りますので、卒業生や退職される方だけでなく、全員が、それぞれに、今、何かをやり遂げた思いを持っていることでしょう。
あるいは、まだ成し遂げてない何かに対して思いを寄せていることでしょう。

私も長い大学人としての最後の春を迎えます。

振り返りますと、年度ごとにミッションがあり、なかなかうまくいかない場合も多々あり、非常に悔しく、大変な思いをしたこともありました。

もちろん、大成功を収めて、皆と嬉しい春を迎えたことも数多くありました。山あり谷あり、そんな春を毎年過ごしていました。

リーダーは、基本的に孤独です。

部活やサークルのリーダーは、部員達を率いて勝利に向かうため時には厳しいことを皆に言わなければなりません。

グループの長も皆をまとめて仕事をしなければなりません。

時には、ひとり涙することもあるでしょう。悔しくて、あきらめかけたこともあったでしょう。

教室のリーダーの教授も同様でしょう。

部の長もそうでしょう。

リーダーは、常に戦っていかなければなりません、自分自身と。

勝利、達成、到達、合格、許可、受託…

様々な目標に向かって各部署の人たちが一丸となって向かってゆくのが、
我々長崎大学人です。

もう20年近く前のことなので、多くの学生の皆さんにとっては記憶に残っていない頃の話ですが、2004年、アテネオリンピックで、体操男子が28年ぶりに金メダルを獲得した年のお話です。

ウィキペディアによると

<体操男子団体が28年ぶりに金メダルを獲得した時のNHKの中継で、当時同局のアナウンサーである刈屋富士雄が富田洋之の鉄棒の演技とこの曲の題名を重ねて実況した「伸身の新月面が描く放物線は、栄光への架け橋だ!」という言葉が流行語大賞にノミネートされ、“曲”の知名度が上昇するきっかけになった>とあります。

実は、その年は、国立大学法人法(平成15年法律第112号)により、国立大学法人長崎大学が長崎大学に設置された年でもありました。

いわゆる“独法化”により、親方日の丸の国立大学から、独自で生きてゆかなければならない大学へなったわけです。

それからは、非常に大変な数年が過ぎました。

この曲の歌詞にあるように“けして平らな道ではなかった”が、まさにそうでした。

私は、その過程で、大学病院長に任命されました。

当時、古い硬直したシステムの中で、若い医師は激減し、皆元気がありませんでした。

しかしながら、“CHANGE” “若人の集う病院” “患者さんのために” をスローガンとして、皆で改革をしていき、皆で成果を掴みました。

数年後に、様々な指標が、日本でもトップクラスとなり誇れる病院になったと思います。

おそらく、病院だけでなく、当時は、各学部、各部署に、同じような思いをして、“いくつもの日々を越えてたどりついた今がある”と思います。

大変な苦勞を乗り越えたと思います。皆さんの努力は誇れるものがあつたと思います。

2004年は、そういう意味で私にとっても、大学にとっても忘れられない年で、リーダーであろうがなかろうが頑張りました。

もちろん、この歌が、私を日本中のみんなを勇気づけたことは間違いありません。

しかしながら、それは過去のものです。

過去にとらわれることなく、迷わず、また、前に進まなければなりません。

それが、大学人にとっての“春”です。

それぞれの道で、また、走り出しましょう。

“だからもう迷わずにすすめばいい、栄光への架け橋へと”

<追記>

時間がある時に、下記のユーチューブを聞いてもらえれば幸いです。

お気軽にご意見をメールください。年度末の思い、卒業の思い、退職の思い、歌に対する思い。なんでも結構です。

返事はできるかどうかわかりませんが、感想をお待ちしております。

<https://youtu.be/oQ8emmkd-HA>

また、卒業生の皆さんは、ぜひ、3月24日ブリックホールで行われる卒業式へご参加ください。

最後に、学歌を皆で楽しみましょう。